

文具エッセイ2020

- 01.見返さないノート■
- 02.生き残った鉛筆■
- 03.金色の名前■
- 04.筆箱見せてパワー■
- 05.鉛筆の存在■
- 06.文具と学校生活の関係■
- 07.ファッションアイテムとしての文具■
- 08.台湾で出会ったボールペン■
- 09.子どもの頃の文房具■
- 10.シャーペン禁止から学ぶこと■

01. 見返さないノート

中学生の頃、私や友人のペンケースはカラーペンでパンパンに膨れ上がっていた。学校の授業では必要ないであろう大量のカラーペンですること、それはノート作りだ。女子たちは見やすくカラフルなノート作りに命を懸けていた。綺麗なノートを作ったからといってそれで成績がつくわけではないし、ノートを丁寧に描くあまり、授業についていけなくなったこともある。

しかし、苦勞して作った割に、テスト前ですらそのお手製ノートを見返すことはほとんどなかった。つまり、ノートづくりは作るだけが楽しいだけの自己満足でしかないのだ。

だが、現在の中高生向け商品の売り文句には「ノートが綺麗にかける」というものが多いように感じる。綺麗なノートを作りたいというのは変わらない中高生の願望だと言えるだろう。

大学生になり、ノートを取る機会が減った今、ノート以外に丁寧に見やすく書くが、なかなか見返さないものがひとつある。それが手帳だ。手帳が埋まるととても気持ちがいいし、シールやイラストでデコりたくなる。

スマートホンが普及した今、手帳がなくても予定管理が容易になった。それでも手帳の売り上げはあまり変化していないという。理由は様々あるだろうが、その一つに日本人の特に女性は何かを綺麗に、自分好みに書き込んでページを埋めたいという欲求を持っており、学生時代にはノート、ノートを使わなくなってからは手帳でその欲求を満たしているのではないか。近年のトラベラーズノートやほぼ日手帳の女性人気をそれを物語っているように思う。

これからますますノートを作る機会は減っていくが、私はきっとこの先も、ページを埋めたい欲求を満たすために、本来の仕事を奪われた手帳をたくさん生み出すのだろう。

02. 生き残った鉛筆

たまにする部屋の大掃除。毎回毎回、部屋にある全てのものを「残しておくもの」フィルターにかけていく。直近で大掛かりな掃除をしたのは、大学入学前の春休みで、「もう大学生だし」と思って、思い切っているいろいろと別れを告げた覚えがある。

ゼミを機に、私が持っている文房具を見直してみると、意外なことに、しぶとく何年も大掃除の選別の中を生き抜いてきたらしい鉛筆たちが目についた。

よく見ればどれも変わったデザインで、新品のままコレクションのようにまとめられていた。チョコ菓子のパッケージ、断面が星型や三角形、芯が虹色、エトセトラ。

いつから持っているのか、中学以降に購入した記憶はないので、おそらく小学生の頃のものだ。なぜこれを捨てずに持ち続けているのか、正直自分でもよくわからない。珍しいデザインに惹かれたか、持ち物が多いほど落ち着く私の性分か。それとも単に新品でもったいないと思っただけかもしれない。同じ文房具でも、鉛筆はボールペンとは異なり、古くなっても書けなくなったりしないし、長ささえあればいつでもまた使い始めることができる。残しておく理由は無いが、捨ててしまう理由も無かったのかもしれない。

長年愛用していたものに愛着がわいてしまって捨てられない、というのはよくある話だが、これは一回も使ったことがなくて、ましてやこれから使う機会もほとんど無いだろう鉛筆だ。どうにも不思議だが、何かが私にこの鉛筆たちを持たせ続けているらしい。

最近不意にできた空き時間で少し掃除をしようと思っていたところだった。この鉛筆たちが今回も生き残ることができるか否かは私の気分委ねられているが、今改めて考えてみてもやはり捨てる気は起こらないので、また来年も会うことになるのだろう。

03. 金色の名前

私の文具への愛着は、一本のシャーペンによって育てられた。親戚から中学校の入学祝いに贈られたものは、「シャーペン」という言葉で呼ぶにはあまりにも高貴すぎる雰囲気を感じていた。PILOT社のグランセは、万年筆やボールペンを含む筆記具のシリーズである。ガーネットのように深いブラックレッドが美しいその軸には、金色で私の名前が刻まれていた。通常のシャーペンだと銀色になっているようなペン先の口金やクリップも金色だ。持ってみると少し重たく、その価値が感じられるかのように感じた。私は宝物のようにそのシャーペンを筆箱に忍ばせ、愛用していた。

ただ、このシャーペンには問題もあった。学校で日々使ううちに、中に詰まった芯が取れなくなってしまった。口金の部分を外すことができないので、自分では修理できない。購入したという店に連絡すると、PILOT社に送るよう伝えられた。修理に出す一方で、どれだけ大切な贈り物だとしても、たかが「シャーペン」一つに大袈裟だろうか、という躊躇いがあった。

後日、報告書とともにシャーペンが届いた。詳細な調査結果と共に、紙には次のようなことが記されていたと記憶している。「名前の部分が削れていたため、修復致しました。このようになるまで大切な贈り物をご愛用して下さい、ありがとうございます。」

壊れたら捨てる。私にとって「シャーペン」とは消耗品だった。しかし、常日頃、手に取る文具には、使い手の人生が克明に刻まれている。その文具に真剣に向き合う作り手、そして想いを込めて贈る者に、敬意を感じた。

いま、部屋を探してみたが、報告書を見つけることは出来なかった。ただあの言葉は、鮮やかな金色と共に、胸に深く刻まれている。高校一年生の誕生日には、自分でグランセの万年筆を買った。高校を卒業したらもう一本買おうと思っていたが、私が愛したグランセのシリーズは廃盤になったそうだ。

04. 筆箱見せてパワー

私は小学生の頃に二回転校した。一回目はいところが同級生だったのですぐに友達ができしたが、二回目は全く知り合いがいない地域に転入することになった。なんとか`ぼっち、は回避しなければいけないが、人見知りなので自分から人に話しかけられない…と悩んだ結果、私はめっちゃくちゃ面白い筆箱を持っていくことに決めた。

小学生の女子は他人の筆箱を見るのが好きだ。誰かが筆箱を新しくすると必ず「筆箱見せて～」と近寄っていく。自分で話しかけられないならあっちから話しかけてもらえばいい。そう考えた私はそこから中の文房具屋で誰もが話しかけずにはいられないような面白い筆箱を探し始めた。

転校初日、私はでっかいスポンジボブのぬいぐるみペンケースにキラキラの鉛筆、蛍光色の消しゴム、刃の部分に絵がついたハサミ、折り畳み式の定規…ありとあらゆる変わった文房具を入れて、校則に違反しない範囲で最大限に筆箱を派手にした。クラスの女子からの反応は最高で、あっという間に大勢に囲まれて質問攻めにされた。はじめは私の筆箱で盛り上がるだけだったのがだんだん見せ合っこのになり、筆箱に飽きた頃にはかなり打ち解けていた。ここまで仲良くなればとりあえずひと安心、無事に`ぼっち、を回避することができた。

振り返ってみると、あの頃の「筆箱見せて」は誰にでも使える話のきっかけ作りのあいさつのようなようだった。そんな便利な言葉を使わなくなったのは、自分で自分の趣味(アイドルとかゲームとかスポーツとか)を説明し合えるようになった中学生頃だろうか。「筆箱見せて」はまだコミュニケーション能力が発展途上で自分の好きなものもちゃんと定まっていなかった小学生には都合がよかったのかもしれない。

05. 鉛筆の存在

筆箱は文房具の小部屋である。中身の文房具たちは一日の大半をそこで過ごし、持ち主に時々使われ、役目を終えると自分の居場所に戻っていく。持ち主も、普段は小部屋にいるはずの文房具たちが机の上に置きっぱなしにされていると、なんだか落ち着かない。

そんな小部屋を覗いてみると、鉛筆、消しゴム、シェープペン、油性ペン、蛍光ペン、多色ボールペン、その芯、のり、修正テープ、定規、メモ帳、付箋…私の筆箱にはこれらが詰まっているが、中身は人それぞれであろう。「筆」箱なのだから、書くための道具が多く入っているのは当然なのだが、私にとっては出番が少ないのに常に持っておきたいものがある。鉛筆だ。

先がまるくなった鉛筆。グリップも何もついていないので、力を込めて握ると中指が少し痛い。小学生の頃にできたペンダコは大学生になった今でも残っている。シェープペンやボールペンと違って芯をしまうことができないから、別売りのキャップをしないと筆箱の中が汚れてしまう。そんな筆箱の中にひっそりと沈んでいるこの一本の鉛筆は、中学生のころからそこに居続けている。

中学以来、このえんぴつを「鉛筆でないといけない」と思って使った覚えは全くない。正直なくても全く困らないと思う。でも時々、教科書の文に線を引くとき、衝動的にメモを取るとき、なぜか鉛筆を使いたくなる。ぼーっと筆箱の中を覗いていて、ふと鉛筆の存在に気づいた時、それを握って落書きがしたくなる。理由はわからない。ほかの筆記用具では感じられない芯の柔らかさを感じたいのかもしれない。だからか、鉛筆を忘れてしまったとき、鉛筆に与えられる役割が無くてもさみしくなる。

中学生のロッカーに国語便覧がしまわれているように、鉛筆には常に筆箱という部屋の中においてほしい。

06. 文具と学校生活の関係

文房具とは人々の生活に密接にかかわるものであり、世間の流行や持ち主の嗜好を色濃く映し出すものだと言えるだろう。私自身の文房具との関わりを思い返すと、物心ついたときから自分専用の文房具を持っていた。

私が通っていた幼稚園では、全員に同じ文房具セットが配られていたが、同じものを持っていても自分のものと他人のものは区別すべきだということを意識し始めたきっかけの一つかもしれない。

小学生の頃は、文房具が一番のおしゃれアイテムであり、流行りや廃れの波が激しかった。自分の小学生の頃の人気文房具を見て、多くの人になつかしいと思えるのは、やはり日本中で流行が広がっている影響だろう。私が小学生の頃は、缶ペンケースや鉛筆のように見えるシャーペン、キャラクターと格言がかかれた派手なデザインのものなどが主に流行っていた記憶がある。私自身は流行りに少し疎い部分があり、周りの友人達に教えてもらって遅ればせながら人気の文房具を買いそろえていた。加えてその頃の私は、お小遣いをもらっておらず親に物を買ってもらっていたので、なかなか新しい文房具を次々に買うことができなかった。

中学・高校生になると、文房具の外見の流行はある程度残りつつも、機能性を重視するようになった。その理由は文房具以外でのおしゃれの仕方を覚えたからだとは私は考える。機能性を重視して文房具をそろえるようになると、流行りにのってあれこれと買い替える必要がなくなるので、一つの文房具を長く使えるようになった。

文房具は本当に大切に使えば何年も何十年も使い続けることができるのが魅力的だ。今の私の理想は、私の母が小学生の時のはさみや定規を使い続けているように、何十年も大切に文房具を使っていくことだ。

07. ファッションアイテムとしての文具

文具に一番お世話になったのは、やはり中学、高校の学生時代ではないだろうか。小学校と比べて勉強も本格的になるこの時期から、学生たちは文具に機能性を求めるようになってくる。そもそも、私の時代は小学校で使う文房具と言えば鉛筆、消しゴム、定規、赤鉛筆くらいのもので、使うものに大して個人差がなかった（今はどうなっているはわからない）。

中学校に入ると、シャープペンシルが解禁され、それぞれ個人の勉強法に合わせてカラーボールペンを使ったり、蛍光ペンを使ったりし始める。おそらく、他人の筆箱の中身が気になり始めるのもこの頃からだろう。特に、テストの成績が良い賢い子はどんな文具を使っているのかよく聞かれていた印象がある。賢い子の真似をするだけで成績が上がるはずはないが、その子の真似をして形から入ることでなんとなく自分も賢くなれるような気がした。

また、特に女子に見られる傾向として、文具のデザインが機能性と同じくらい重視されるということが言える。文具の役割は、言うまでもなく文字を書く、消す、線を引くなどであるから、そこにデザイン性は関係しない。しかし多くの学生たちがキャラクター柄のものやパステルカラーのものなどデザインがかわいいものを愛用していたのは、学校生活でおそらく最も長い時間を共にする文具が、彼女たちの好みを表すものとなっていたからだろう。

大学生の今では、ヘアスタイルや服装、メイクなどで好きなように自分を表現することが出来る。しかし中学、高校では、多くの場合制服があり、校則によって髪形にも多少制限がかかる。そんな中で、学生たちが自分の好みを表現したり、こだわりを見せたりすることが出来るのが文具だ。そのため、クラス替えなどで初めて会った人のことを「あの柄の筆箱を使ってる人だ」と覚えたり、珍しい文具を使っている人に「それ使いやすい？」と尋ねたりと、学生たちにとって文具は印象付けや会話のきっかけなど本来の機能以上の役割を持つ場合が多い。いわば、学生たちにとって文具は、勉強を快適に進めるための道具であると同時に、自分の好みやこだわりを表すファッションアイテムでもあるのである。

08. 台湾で出会ったボールペン

私にとって「文具」にまつわる印象深い出来事の始まりは、2016年に遡ります。中学校を卒業し、高校受験を終えた私は受験から合格発表までの期間を台湾で過ごしていました。祖母との初めての二人きりの卒業旅行であり、私にとっての初めての海外旅行でした。4年前の話であり、当時はInstagramなどの文化も発達していなかったうえ、私自身まめに記録するタイプではありません。それゆえ、おぼろげな記憶なのですが、ずっと印象に残っていることがあります。

私たちが参加したのはお年寄りがメインターゲットのパッケージツアーであり、台湾の名所を巡るものでした。全員でバスを降り、ある寺院に行ったのです。名前も思い出せないのですが、私はそこである特別なボールペンと出会います。古来、中国には科挙という試験がありましたが、その科挙に合格することはたいへんな荣誉だったようです。その科挙合格祈願が、現代の受験合格祈願に類似していることに由来し、その寺院に「いざという時にしか使ってはならないボールペン」が販売されていたのです。

祖母がそれを発見し、私に買い与えてくれました。高校受験はもう終わっているのですから、それからしばらくは出番がないわけです。上にも述べたように、あれから4年が経過しましたが、私はいまだにその「いざという時ボールペン」をおろすことが出来ていません。

人間という生き物は、未来の概念をもつ生き物です。「現時点ではこれが重要でも、あとあとにより重要な時が来るのではないか」という考えが私を引き留めるのです。赤点をとった科目の再試、受験票の記入、大学受験…これまで様々な場面で使うことを思いとどまってきた私ですが、果たしてこのボールペンを使う日はやってくるのだろうかと思うのです。⇒論考「信仰と文具」もご参照ください

09. 子どもの頃の文房具

服にかばん、かばんに入ったお気に入りのもの、髪型にメイク、所属サークルやちょっと遠いけれど好きな場所。行動範囲の広がった大学生である今でこそ「わたし」を表現するものはいくらでもある。

でも、家庭と学校を中心にまわっていた小中学生のころはどうだっただろう。小学校では持ち物が細かく決められていた。かばんはもちろんランドセル、上履きの種類やお道具箱の中身までみんな同じものを持っている。そんな中で私たちが自分の好みで選べたものといえば、文房具のデザインだった。筆箱や鉛筆キャップ、消しゴムなどの種類やデザインはとにかく豊富にあったから、誰かとかぶることもあまりなかった。そして新しいものや珍しいものを持っていると必ずと言っていいほど友達のあいだで話題になる。ときどき連れて行ってもらえる、書店に隣接した文房具コーナーで、流行りの形ながらもお気に入りのデザインのものを探すわくわくしたした気持ちは、いま、お店で服をみる感じとよく似ている。

小学校を卒業すると、これ以上ないぐらい厳しい中学校の風紀が待っていた。ボールペンとシャーペンが解禁したものの、身だしなみについてはほとんど自由がなかった。なので文房具に対する関心は相変わらず高く、誕プレも文房具を贈り合うことが多かった。それでも徐々に変化したものもある。どんなものを求めるかだ。ハートやクローバー柄のようなキラキラした可愛いものから少し落ち着いた雰囲気のものに、使いづらくても珍しいものから機能性が高いものに。後者に関しては、クルトガ派とフリシャ派に別れていたのを覚えている。

いま思えば小中学生の頃の私にとって、文房具は色々と制限のある中で「わたし」を表現するもの、つまりオシャレだったのだろう。もし、文房具もすべて指定されたものしか使ってはいけなかったら…そう思うと少しだけ怖くなった。

そういえば、最近はずっくり文房具を見に行っていない。この自粛が不要になった暁には久しぶりに大きめの文房具コーナーに行ってみよう。知らない間に思いもよらない新しい文房具が生まれているかもしれない。(2020年4月執筆)

10. シャーペン禁止から学ぶこと

「シャーペンを使ってはいけません」。

私と同じ年代の人なら、小学生の頃に先生からこんなことを言われた経験があるのではないかと。実際に友達に小学校の頃シャープペンシルの使用が禁止されていたか聞いてみたところ、多くの友人がイエスと答えた。では禁止の理由について考えたことはあるだろうか？私の小学校では禁止の理由について先生から説明がなく、私はなぜ駄目なのか疑問ではあったのだが、先生に直接理由を問いただすほどの勇気も当時はなく、そのまま小学校を卒業していた。大学生になった今、友達に小学生時代に禁止の理由をどんな風に説明されたか尋ねたところ、筆圧に関する理由が出た。確かに一般的なシャーペンは鉛筆より芯が細く、鉛筆の方がより少ない力で濃い文字をかけるため、握力が未発達な子どもにはシャーペンより適しているのかもしれない。しかし、ある友人は禁止の理由として「ノック音がうるさくて集中できない」と言われたことがあったそうだ。この理由は明らかにおかしい。他にもよくよく考えればおかしいなと思う理由で禁止を強要された経験がある友人は多くいた。

さて、今回のテーマは「私と文具」なのだが、私にとってはこのシャープペンシルという文具が、当たり前なのに疑問をもつきっかけだったのだ。文具に限らず子どもの頃に強いられたルールの中には理由不透明なものもあった。だからこそ私は従うべきか否かを自分で判断するために勉強しようと思った。常識を疑い正しさを判断するために学ぶというメカニズムは大学生になった今もおそらくこれからも大切だろう。コロナウイルスの影響で学校にいけない小学生たちにも、今だからこそシャーペン禁止を含め、学校のあらゆるルールについて考えてほしいと思う。⇒論考「小学生のシャープペンシル使用禁止ルールについて～文具の調和を考える～」もご参照ください

『文具に関する論考と企画：奈良女子大学文具ゼミ 2020』

〔2020年度「文化社会学演習」WEB版報告書〕 <https://bungu-narajo.org/>

2020年8月1日 編集・発行 国立大学法人奈良女子大学文学部

人文社会学科文化メディア学コース 小川伸彦研究室編

〒630-8506 奈良市北魚屋西町 E-mail ogawanobuhiko@cc.nara-wu.ac.jp